

マインドコントロールされ、子供や孫に囲まれて平凡に暮らしている。

終わりに一言申し上げます。

全抑協に入会して早速持ち上がっているシベリア抑留者慰霊碑の建立が敷地も決まったのを知り、ぜひともこれが実現し、「平和の礎」として永くこの地にあつて我が国の前途が正しい方向に榮え、さらには本日終戦の日を迎える中で世界が平和になるよう見守って下さることを願って信条の一端といたしたい。

## シベリア抑留と闘病生活

愛知県 糸井紀伊

一、出生から入隊

大正十(一九二一)年一月二十一日 和歌山県  
田辺市にて出生

父は水産物加工業が主たる職業 三男三女の二男

二、ソ連軍侵攻前

昭和二十(一九四五)年六月二十九日、朝鮮・京城(ソウル)・龍山駅前集合。たくさんの幟や見送り人の中に友人の樋上さんの奥さんが小さい子供さんを背に、心尽くしの弁当を持って来てくれたのには感激した。

飛行機工場に動員されていた時の彼女がお守りを入れて、その中には万葉集の

今日よりは 省みなくて 大君の

しこの御楯と 出でたつ我は  
と書いてあつたが、私は

千万の 戦なりとも 言挙げせず

取りて来ぬべき 男の子とぞ思う

の方が良いと決意を伝えた。

羅南に向かう列車が貨物列車だったのには驚いた。しかし狭いながらも寝て行けるのでかえって

楽だったのは新しい発見であった。

三十日午前三時羅南着。駅にはまばゆいばかりの照明がついていて真昼のようだった。ここは武名高い北辺の守り第十九師団のある所である。駅を出ると、街は真つ暗で、後は黒々と山がそびえ、残月が懸かっていた。街は静寂そのもので、官舎の暗いれんが塀が続き、当時流行していた「国境の街」の歌詞が思い出される空気であった。

六月三十日、現役兵として正式に朝鮮羅南師団（十九師団）通信隊に入隊した。

装備は三八式歩兵銃のほか無線通信機（班として共用）。半島出身の現役兵が半数を占めていた。翌日は身体検査。続いて体力検定があり、二千メートル競争で、二百人の中で第一位だった。続いて行われた、洗面器に水を張って、その中に顔を入れる呼吸停止でも五十四秒で二位となり、班長の心証をよくした。俵担ぎは腰がふらふらして笑われたが大目に見てくれた。

翌日からは訓練が始まり、普通三カ月の第一期

教育を三週間で済ませた。内務班には暴力禁止と書いた注意書きがあったが、なかなか暴力はやまらず、甚だしいのはおまえの顔が気に食わぬと言って殴られた初年兵もいた。

しかし班長は二、三週間前に召集された人で温和な人であった。洗濯も自分でし、新兵にさせるようなことはなかった。また班付の金子上等兵は同盟通信のオペレーターで、一分間に百五十文字が打てるとかで（普通は九十文字くらい）、アララギ派の歌人で季語集を持っていた。こんな人もいるのかと心が安らいだ。

七月末には朝鮮とソ連との国境に近い所に陣地を構築することになり、牛車馬車で兵器、弾薬、食料等の運搬に初年兵も参加した。そして生まれて初めて牛車を引いていったが、牛の大きな目玉がこちらを見るのは少々気味が悪かった。

八月五日、いよいよ風雲急ということで、関東軍に編入され、百三十九師団通信隊として満州東南部、朝鮮との接点（昭和十一年張鼓峰事件の

あつた所の南)、年じゅう雲と霧に覆われている  
というので雲霧嶺と言われる所に急行した。

午前五時起床、完全軍装に身を固め、登り七里  
下り六里という山道をほとんど走るようにして道  
を急いだ。引率指揮は斉藤班長と金子上等兵で  
あつた。

昼食は一人飯ごう一本(白米四合)で牛缶が一  
個ついた。これからはまともな食事にはありつけ  
ないからしっかりと食べておけということであつ  
た。さすがに四合食べると、歩くときうつむきに  
くかつた。

午後の下りになつても暑さは変わらないし、出  
発前、馬車につながれても、張り切つて、しきり  
と前掻きしてパツカパツカと足踏みしていた黒馬  
の玄拓があごを出して泡を吹き、続いて牛車の牛  
もへたりこんで動かなくなつた。それぞれ荷を他  
の牛馬に分けて積むことになつた。初年兵も一人  
日射病にかかり古年兵が谷の小川に連れて行つ  
た。しかし後で聞くと死んだとのことであつた。

真つ暗になつた八時ごろ現地に着き、隊長から  
「御苦労。今日は遅いからすぐに休め」と言われ、  
決められた所に横になつた。

ところがである、突然大きな声がして、「今  
入つて来た初年兵は起きろ。ここには吉津上等兵  
が熱を出して寝ている。我々は下の川まで行つて  
水を汲みタオルで冷やしてやっているのだ。昨日  
や今日入つて来て、そのまま寝るとは何事か」と  
言つて一人ずつほつぺたを殴られた。

そうならそうと言つてくれれば、言われるよう  
にするものを、我々はそんな事は知らなかつたの  
で、隊長の言うままに寝ようとしたのであつた。  
情けないと思いつつ雲霧嶺の第一夜を眠つた。

この辺にもオオカミがいるとは前から聞いてい  
た。渾春のある分哨がオオカミに襲われて、全員  
五、六人だつたか食い殺されたということであつ  
た。それで「銃剣はのどに当てて構えよ。そうす  
れば飛びかかつてはこない。決して撃つてはなら  
ぬ」ということであつた。そしてさらに「トラも

出て来ることがあるから崖を背にして後も気をつけよ」と言われた。

さらに、馬繋場の馬が一頭足らぬから探しておけという申し送りもあつたが、トラやオオカミに食われてはかなわぬと皆申し送りに伝えるだけであつた。

陣地構築のための機材と云えば、四センチくらいの丸棒、長さはメートル二十センチくらいのをとがらせたものを大ハンマーでたたいて穴をあけ、それが何個か掘れたところでハツパを掛けて岩山を崩していくというようなことであつた。

朝鮮にも削岩機を専門に作る会社があるのに、何で今どき人力でなんて不思議であつた。これではとても間に合わないと思つたことであつた。

案の定八月十日に構築中の陣地を放棄し山を下りて凶徒に引き揚げることになつた。

### 三、ソ連軍侵攻

八月五日我々が雲霧嶺に着いた夜にも、ソ連の

飛行機が来て照明弾を落とす、それが落下傘でゆらりゆらりと落ちてゆく間は昼間のように明るく、こちらの配置はある程度つかまれていたと思われる。

そういうことが六日、七日、八日と続いて、九日朝には前線から「敵来襲。目下応戦中」の電信が入つた。

### 四、終戦

百三十九師団の全面には歩兵が二個連隊展開し、師団通信の先方もその部隊に配置されており、また朝鮮軍司令部、参謀本部とも一時間ごとに連絡を取っていたが、通信はすべて暗号文で解読班を通して上に報告されるので、我々兵にはあまりわからなかつた。

ただ、一つの陣地に対して「現地を死守せよ」という命令だけで、「どうしても守りきれない」と言う「一山下がれ」ということで、前線はその度にかなり犠牲者を出している模様であつた。

①八月十五日は部隊は図們にあつて、私は通信隊の弾薬を積んだトラックの警備を命じられた。忘れもしない暗雲が低く込め雲の間から差し込む光が不気味に雲を染めていた暑苦しい日であつた。

ソ連の襲撃機が三機飛んで来て図們の駅に向かつて急降下爆撃を行った。後退翼の翼に金属音のエンジン音で、絵にかいたような急降下をする、しばらくして黒煙が上がり、やられたなと思つた。飛行機の性能は大したものではなかつたが、こちらには対抗する飛行機も高射砲もなく、敵のなすがままであつた。

駅への爆撃が終わると、今度は我々のトラックの方に来て、執拗に右から左からと射撃を加えてきた。そのたびにトラックの下で、右から来たら左へ、左から来たら右へと逃げ回つていた。

そのうちに敵飛行機もあきらめて他へ行ってしまった。すると近くの防空壕から古年兵が出てきて、「おまえそんな所にいたのか。そんな所にいたら殺されてしまうぞ、また敵機が来たら防空壕

に入れ」と教えてくれた。真正直な初年兵は、死んでも守備位置を離れないつもりでいたから、そんな融通も利くんだなと感心したものである。

そして図們江を渡つて朝鮮側の南陽に移動することになつた。

橋は八百メートルくらいあり、河の中州にはすでにソ連の戦車が入つていて、橋を渡る我々に真横から一斉射撃を浴びせてきた。赤、青の曳行弾が頭上を飛び、生きた気がしなかつた。

走りながら、今日の洗礼は、言わば私にとつては初陣なのであるが、それが逃げる負け戦とは情けないなと思つたことであつた。それでも曳行弾はありがたいもので、その高さがわかつて少しは安心した。そして命からがら橋を走りきり、向この堤防の下に飛び込んだときはほつとした。

そういうことで、八月十五日正午の天皇の放送は聞けなかつたが、夕方日本の軍使らしいのが乗用車の窓から白旗を掲げて山の方に進んで行くのが見えた。

いよいよ暗くなったころ、我々の今夜泊まるころの裏山で、突然「海ゆかば」の合唱があつて、それが終わると、大爆裂音があり、さらにしばらくすると、手や脚に負傷した人たちが山を下りてきた。渾春野戦重砲隊の人たちであつた。砲弾を詰めて敵戦車を待ち構えていた重砲隊が、にわか「撃ち方止め」の命令を受け、ふんまんやる方なく、自爆したということであつた。

我々の通信隊長は濠の中で酒を飲んでいゝうことであつたし、伝言として「ノモンハンと同じような有利な条件で停戦協定ができた。日本に帰ることになるが、どんなに腹の立つことがあつても決して暴発をしないように。そんなことをすると全軍の安危にもかかわる。くれぐれも自重するように」ということであつた。

日本が負けたことは、その後の武装解除ですぐにわかることであつたが、隊長としては皆に与えるショックを思つてそういう言葉を使ったのであろう。

混乱したのは隊長と将来職業として軍人にならうとしていた人くらいで、他の人はまだシベリア行き必死で戦つてきた戦争はどうしても勝てなかつたという無念さと、これから先日本はどうなるのかという不安もあるが、とにかく故郷に残して来た妻子を思い、早く帰りたいというのが本心であつただろう。

八月十五日の夜は、南陽のもと師団司令部の宿舎が我々の宿泊所となつた。屋根には昼間のソ連機の襲撃で穴があき、床には室内をあちこち当たりながら空転した二十三ミリ機関砲の弾が落ちていた。まだこの部屋に入つていなかっただけに何ともなかつたが、早くに入つていけば危ないところだつた。この部屋は師団司令部のだれが住んでいたのかはわからないが、残つていたシーツを一枚もらい、縦に三つに裂いて縫い合わせて腹巻にしたが、これはその後の野営の際、私の腹を守ってくれた。

それから部屋に残っていた本の中から、『アンコールワットの遺跡』というかなり大判の本を一冊と、どんな役に立つかわからないが三角測量の本の二冊を拾って今後の暇な時の読み物にした。

②八月十六日再び凶們橋を渡って、凶們の小学校で武器を捨てた。

我々は武器を捨てるのに、居合わせたソ連兵は武器を持ったままであったから、これで我々が負けた事をはっきりと悟った。師団通信隊の井上大尉はその後我々の前には出てこなくなり、中隊指揮班長の三浦曹長が隊の指揮をとり、軍は日本に帰るまでは日本軍の組織を守って帰るということになり、銃は捨てたが、旧軍隊の組織によって行動することになった。

ただし、八十人ほどいた半島出身者は自由にせよということであったから、一人減り二人減りして間島（延吉）に向け出発するときにはほとんどいなくなっていた。そして次に間島に集結するまで一週間ほどそこで天幕生活を続け、気の合った

者同士二、三人のグループあるいは十人くらいで天幕を張り、共同炊事で過ごすことになった。

私が入れてもらった組は旧日本軍の乙種幹部候補生の仲間で、旧制の中等学校を出ていて、入隊後一年半くらいになっていた。ある程度軍隊の様子にも慣れており、抜け道も知っている要領の良い人達で、いろいろの点で助けられた。

と言うのは、そういう戦乱の中で糧秣庫の場所等知っていて、そのうえ馬も一頭どこからか引張ってきて、米一俵と砂糖一袋（一〇〇キログラム入り）を取って来て我々にも分けてくれた。砂糖には飢えていたので飯ごうの半分ほどを一日で食べたら下痢をしまった。

③八月二十二日、間島に集結することになり、午後凶們出発。

途中には馬の死体や友軍の死体もあったが、そのまま放置されているので五十メートル先からその死臭がして何があるかがわかった。馬は四肢を空に向け、人間は真っ黒になってガスでぼんぼ

んになつていた。草むすかばねとはいふものの、親には見せたくないと思つたことだつた。でも、せめて誰がどこで死んだくらいは両親に知らせなくては、両親はいつまでも待つてゐるかもしれない。

その点は我々かつて同じだ。一緒に入った人は寄せ集めの者ばかり、それぞれの家も親も知らない者ばかりである。身につまされて、あの真つ黒の死体を気の毒に思つたことである。

出発が遅かつたので、すぐに夕方になり、瞬く間に真つ暗になつた。前の人にしっかりとついて行かないとはぐれてしまうので、一生懸命に前の人を追つた。しかし昼の疲れで半分うとうとすることもあつて、前の人にぶつつかつて目が覚めることもあつた。また、暗いながらも周囲の景色には気を配つてゐるので、一瞬うとうとした間に周囲の状況がすっかり変わつていて、先ほどはまだ月の高さはあの山の上だつたのに、今はやや傾いた地点の上に下がつて、ちよつとの間であるが

眠つていたのだなと覚ることもあつた。

「ここらで大休止」という連絡があつたが、天幕を張る時間もなく、草むらに横になつて雑のうを枕に眠つた。傍らにつないだ前田上等兵が昼間連れて来た馬のカツカカツというひずめの音が邪魔になつたが、いつの間にか眠つてしまつた。

夜が明けて、間島に行くまでにはソ連の戦車が次々と我々を追い抜いていく。泥んこになりながらも故障せずに行つて行く。操縦してゐる兵はそう賢そうではない。それでもエンジンは順調な音で走つて行く。

一方、丘の上に並べられたそれとわかる日本の戦車は、角を斜めに落とした薄い鉄板をびようで留めまくつた、玩具のような戦車である。これでは戦車同士の撃ち合い等できたものではないと思われた。

関東軍は強そうなことを言つていたが、ソ連の戦車の威力は先のノモンハン事件で嫌というほど経験してゐるはずなのに、人間地雷と火炎ビンに



頼つて、兵士をむぎむぎと殺していたのではないだろうか。

続々と間島目指して進んでいる隊列の中から、ふと傍らの草むらに休憩中の友軍の有線通信隊を発見した。しかもその中に旧知の山中君を見つけたときは感激した。彼らは師団通信隊の本部から配下連隊に配属されていたのであった。本当に地獄で仏にあうとはこのことか。うれしかった。

#### ④間島収容所

ここには東満州国境地帯に配備されていた日本軍約三万人が収容された。男女別々に収容されたから、女の人はどうなったかわからない。敗戦国の悲哀である。

収容所の外には群衆の万歳（マンセイ）と言う歓声が夜通し聞こえ、爆竹が朝まで鳴っていた。この間島地方は戦前から朝鮮、満州にいた朝鮮人が日本人の支配を嫌って逃げて来た人の多い地域であった。

収容所には各隊、各分隊ごと天幕がそれぞれ思

い思いに並んでいた。大勢の人が集まると、心強くなつたし、中には散髪屋もいるし、遊び道具を持つている者もいて、一見賑やかな感じであつた。これだけの人間が集まればソ連軍も一気に機関銃で掃射するわけにもいくまいし、生命の危機も少し薄らいだ感じであつた。

しかし一番知りたい帰国情報はさっぱりつかめなかつた。そして結婚一週間目に召集になつた人や、もう四十歳を越えた初老と言うにふさわしい人もいて、彼らは家族の安否を気遣っているのかそのまなざしはうつろで、いかにも哀れであつた。

一方、若い現役兵の多い我々の隊は、相撲をして憂さを晴らしていた。五人抜きをした松阪兵長の足は十一文くらいで、土俵に根がついたようで、とても我々は押せなかつた。しかし後年戦友会で会つたときの彼は、背はそう大きくなく、念のために見たその足は意外と小さかつた。やはり間島の草相撲での彼は、兵長という身分と自信が

彼を大きく見せていたのであるうか。

## 五、シベリア抑留地への旅

九月十三日 間島出発

吉と出るか凶と出るかわからないが、とにかく間島収容所を出て行くことになった。日本に帰れば幸いであるが、万一労働させられることになっても、生きて帰るつもりであったから、脱走しないで、運を天に任せて皆と一緒に行動をすることに決めた。

それより先、八月も末になったころ、隊長から、「これから作業大隊を編成する。特業のある者申し出よ」とのことであった。

私はこの年の五月にドイツが降伏したときに、四十五歳以下の男子は「毛布一枚を持って駅に集合せよ」とのソ連軍の指示があつて、多分ソ連に連れて行かれて労働させられるのではないかというニュースを聞いていたので、我々もソ連に連れて行かれて、労働させられるのではないかと思つ

た。

それはそれで仕方ないではないか。戦争ならば何どき弾が飛んでくるかわからないが、労働ならば気をつけて作業をすればめつたなこと死ぬものではないし、何年かかろうとも生きて帰れると思つた。

そして同じ労働ならば機械工を志願しようと思つた。正直に言えばそれほど経験があつたわけではないが、見よう見まねでできないことはないような気がして、わからぬことは教えてもらえば勉強にもなるしということであつた。

後にソ連に入つてから機械工ばかり集まつてみると、三菱の職長だつた武田兵長、製紙工場の大木だつた高橋上等兵、日立製作所の空気機械の大木一等兵、津上製作所にいた田村一等兵等かなりの経験者がいて、私はその後尾について何とかその日その日の仕事を完遂し勉強をさせてもらつた。

いよいよ東に向け行軍開始。開戦前後しばらく

駐屯したところのある懐かしい図們市街の北を通り山を越えることになった。折れ曲がった之の字型の山道を登って行ったが、銃はなし、弾もなしで、身軽なはずなのに、あごを出してふうふう言って登って行った。道端には持ちきれなくなつて捨てた乾パンの袋や米の入った靴下も捨てられていた。食料のない日もあるだろうからその時のために持っていた方が良いのはわかっているが、今は重くて仕方がなかったのだろう。と言つても我々も自分の物を持つのが精いっぱい、人の物まで拾って行く気にはなれなかった。

峠をやつと越えて、平原に着いた時に、戦闘地域から下がってくる居留民の人たちに出会った。四、五十人はいただろうか。女の人は布団を担ぎ、前には乳飲み子を抱き、両手に歩ける小さい子の手を引き、男手はない。四十五歳以下の男子は現地召集されてしまつて、残つたのは老人だけである。「兵隊さん」と叫んでくれるが、今の我々には手助けする自由もない。我々でさえこの

山を登ってくるのにやつとこさだったのに、子供を抱えてこれから先だけ行けるのだろうか。朝鮮に行くのだそうだが、それまで何人たどり着けるだろうか。恐らく暴徒に遭えば着の身着のまま丸裸にされてしまうのではないか。この人たちの姿は五十七年経つた今も忘れられない光景である。

日本の生命線を守る開拓団とか昭和の屯田兵とか鳴り物入りで宣伝し、また、その開拓団員のためにと政府も県、市、町、村挙げて大陸の花嫁を募集したのではないか。

居留民を守るはずの関東軍は自分らを守るために、開拓団の四十五歳以下の男すべてを召集し、そして居留民を置いて、自分らだけ後ろへ後ろへと退いたのでないか。

誰がこの満州の運命、満州に來た日本人の将来を守る意志があつたのだろうか。

軍の上層部には一貫して大局を見る部署がなく、局部局部の判断、行動しかなく、最終的には

誰も責任を取らず居留民を捨てたのでないか。

その時々業務だけでその日を過ごして、基本的な問題をほうっていたのでないか。

異端の將軍と言われた石原莞爾が東条伍長と痛罵していたが、上層部には近代戦を戦う能力がなかったのではないか。

ソ連のジューコフ將軍の回顧録にも、日本の兵士は勇敢だったが上層部は無能だったと書かれていた。

戦後になっても、バラバラで引き揚げて来て、他の団体に比べ、組織化されていない外地引揚者は積極的なPR活動は余りしていないようだが、引揚げ孤児の訪日の際に終戦時の模様が報道され、また映画化された「大地の子」の冒頭の終戦時の模様や、最近発刊された「葛根廟事件」の悲劇（千三百人のうち二百人足らずが生き残った）のようなことは、全満州の至るところで起こっている。

あの凶們の山で、居留民の人たちから「兵隊さ

ん」と呼ばれても何の手助けもできなかったのは、生涯忘れることのできない記憶なのである。

夕方になると、少しずつ雨が降り出し、しばらく行った所で「今夜はここで宿営」ということになった。既に草はぬれているし、どうして寝るのかと一瞬たじろいたが、勇を振るい起こして、ろうそくと鋸を取り出し、谷まで下りて行って灌木を四本切り、元の場所まで帰って来て、枝を払い、幹四本を柱に立て、天幕を張り、地面に油紙を敷いてその上に携帯天幕と毛布を敷き、天幕のできたところで先に払った枝を燃やして暖を取り、米に畑で採った豆を入れて炊き、腹ごしらえのできたところで眠りについた。

雨は降り続き、ひざから下はずぶぬれだが、ゲートルを巻いてあるし革靴であるからそんなには寒くはなかった。もちろん頭は天幕の中で大丈夫であった。それと南陽の師団司令部でもらったシーツの腹巻が役に立ってくれた。手足はぬれても腹は冷えなかった。

敗戦の惨めさを思い知らされた第一日目であった。

九月十四日 第二日目

この日は朝から快晴であった。昨夜雨にぬれた毛布、天幕等を肩に載せて行軍した。こんな格好は平時ならとてもできたものではないが、軍規も少しは大目に見てくれることになった。

峠に近くなつた所で、友軍の陣地らしい所があつて、タコツボが幾つも並んでいた。そしてその穴の傍らには葉きようがうずたかく残つていて、ああ、ここで陣地を死守せよと言われて、最後の最後まで弾を撃ち尽くした兵士がいたんだなと思ひ、思わず合掌した。

その峠から東は、地形は東に向かつて下がっており、かなり遠くまで見通すことができ、ソ連の戦車が、あるものは引つ繰り返り、あるものは横を向いて、ちよつと敷えただけで七、八台はいた。肉薄攻撃であるいは火炎ビン攻撃で命を落した若者がいたわけだ。

道は下り坂で少しは楽になった。しかし真夏は過ぎたとは言え、日中はまだ厳しい暑さで、疲れもあつて、十分間の休憩のときは、道端だろうと草むらであらうと、雑のうを枕にし、帽子を顔の上に乗せると、それこそ一分もたたずに落ち込むように眠つた。一切の音は消えて静寂そのものである。

やがて隊長の「出発準備」と言う声が闇の中から聞こえて来て、遅れてはならぬという意識はあるがなかなか目が覚めず、奈落の底から命綱を手繰つてはい上がる気持ちであつた。

あるとき何か用があつて眠らなかつたとき、ふと隊長を見ると、彼は腰もかけずに立つたままの時計を見ていた。隊長は偉いなあと思つたことであつた。

今夜の宿営地は川原であつた。川は近く、枯れ木も多いようだし、早速飯ごう炊さんにかかり、手分けして作業をし、できたところで食事を済ませたが、寝る段になつて、石ころだらけで背中が

痛くて仕方がない。満天の星はキラキラと輝き、今にも降ってきそうであった。帽子を顔にかぶせてやっと眠った。夜中に目が覚めると、帽子も毛布も夜露でしっとりぬれていた。

九月十五日 第三日目

海が見えた。この海は日本に通じているのだ。皆の目は輝き、足取りも軽くなってきた。久しぶりに見る青い海である。周囲は国境の緩衝地帯で、あたりは灌木が茂り、陣地もなく、人も住んでいないようであった。

昼の休憩は二時間あって、古い兵隊は飯ごう炊さんを済ませて昼寝をするのであるが、慣れない我々初年兵はや々と飯ごうに炊いたものの、食べる時間がなく、そのまま持つて歩いて、次の休憩のときに食べるようなことであった。

しかし、だんだん慣れてきて、昼食の休憩になると、足の遅い山中氏は早速飯ごうを掛ける穴を掘り、持っている小枝で炊き始めると、やや足の速い私は水を汲みに走り、また年取った池田さん

は次の炊さんのためのまきまたは小枝を集め、分担協力の結果、どうにか人並みに昼休み中に食事をする事ができるようになったが、昼寝ができるようになったのは後のことであった。この飯ごう炊さんで松の生木でも燃やせるようになった。

行軍中我々を監視しているソ連兵はいずれも若く赤い顔をして四六時中「ダバイ ブイストリー」を連発していた。早く歩けということである。こちらはその声にも慣れて相変わらずの緩慢な歩みであった。

今夜の宿営地は収穫の済んだ畑だった。しかしここも寝難い所だった。畝の高い所を頭にすれば腹は低い所にくるし、腹を高くすれば頭は下がるし、結局畝と畝の間に身をすくめて眠るしかなかった。日本に帰るまでしばらくの辛抱だと思いなだめるしかなかった。

九月十六日 第四日目

この行軍にもだんだん慣れてきて、今日はソ連のどこが見れるのか楽しみに思われてきた。

ソ連の兵隊の装備はと言えば、銃か自動小銃で、服装は半袖シャツに鉄かぶと、ただし水筒は持っていないので、水を飲みたいときは鉄かぶとで道端のたまり水をすくって飲む。毛布も天幕もないので、寝るときはそこら辺の草むらでごろ寝する。それでやっていけるのだから大したものだ。

日本人捕虜は、服は二着、天幕、毛布に雑のう。その中には日用品が入っている。武器を除き、装具だけを見れば、どちらが負けたのかわからない。

しかし、何故この猿のようなソ連兵に負けたのだろうと思うと情けなかった。

ドイツからの新聞記事に、殺しても殺しても野獣のように押し寄せてくるソ連兵というのがあったが、本当にそうだ。

(昭和二十年のことで、今は違うのはもちろんである)

九月十六日 第五日目

この日の我々の宿営は最高の所であった。平地でしかも水の便はよく、麦わらはたくさんあって、それを下に敷いたのでクツシヨンはよく、日本に帰ったらこれにしようと思った。十分に休息できた。

九月十七日 ソ満国境通過。いよいよソ連領である。第六日

その中にソ連人の家も見えてきた。かなりの町らしい。白壁の家が多かった。しかしいよいよ接近してみると、一軒一軒はかなり離れていて、遠くから見るとき家がつながって見えただけだった。人影は見えない。どこかに働きに行っているのだろうか。

しかし今日の宿营地と定められた所は泥んこの平地であった。水たまりはないが、革靴で歩いてもぐちゃぐちゃになるような所であった。一体どうして寝ればよいんだろう。まさか立ったまま夜を明かすこともできないだろう。

決められた以上文句を言っても通るわけではない

し、とにかく考えた。

そして、まず油紙を敷きその上に携帯天幕を敷いて、その上に毛布を敷いた。幸いだったのは雨がやんでいたことであつた。上から毛布をかぶりとにかく静かに横になつた。

尻や背中の中の体重のかかる所は沈んだが、顔は上がつていたので、疲れていたせいもあつて眠ることができた。しかしこのことは後々自分の人生で教訓になつた。どんなに悪い状況の中でも、慌てずに考えよということであつた。

九月十九日 ポセツト湾 クラシキノー着。

#### 第七日目

汚れた紺色の上下の作業着に紺の帽子をかぶつたソ連人を初めて見た。労働者らしかった。顔色は暗く、ひどく暗い感じであつた。

その後、我々が次の命令を待つて隊列のまま休んでいると、五、六人のソ連人が来て、我々の持ち物を調べ始め、時計や万年筆等を奪い始めた。渡せば何とも言わなかつたが、反抗すると四、五

人で寄つてたかつて殴るけるの乱暴をしだした。

中隊長がソ連の将校に告げると、彼はピストルを撃つて彼らを追つ払つてくれた。我々についていたソ連の将校、兵士は、我々の逃亡を防ぐとともに、我々の護衛をするのも任務であつたことがわかつた。

七日歩き通したが、歩く速さは全くノロノロで、常に監視兵にダワイ、ダワイ、ブイストリーと言われてきたが、やはり野営で腹を冷やして下痢をする者がかなりいた。幸い私はシートで作つた腹巻の効果があつて無事雨の中の露営も切り抜けることができた。

十月二日 クラシキノー出発 奥地の收容所に向かう

さあ期待の列車乗り込みであつた。地方人たちのトウキョウダモイの言葉はあつたが、確定的な連絡はなく、もちろん半信半疑であつた。乗れと言われれば乗つて、様子を見よう。これだけの人間をまとめて殺すようなことはあるまいというの



が唯一の心のよりどころであった。

列車は途中何回も止まり止まりして北に進んだ。大きな駅では、給水か、食事のためか、三十分くらいも休み、ソ連人の乗客はプラットホームでダンスをしていた。

列車はまた走り出して北を向いて走っていた。もし日本に帰すのであれば、東へ進路を取るべきだが、依然として北向きなので、隊員の中にはため息が漏れ、「どうなつとしやがれ」と何かヤケツパチな声も聞こえて来た。それを聞くと、いよいよかという気になったが、今さら列車から飛び降りることもできず、悶々と無情な列車の響きを聞くだけであった。

十月七日朝　ホーロ地区ビヤジムスカヤに到着  
この町で列車は何回か向きを変えた後、ある工場らしい建物の近くに止まり、機関車だけは我々を残しどこかへ行ってしまった。

あたりは既に雪に覆われていた。冷気が身にしみる。用便で外に出たときに柳のような木の枝に

眼鏡を飛ばされて、捜すのに苦労した。眼鏡があればもう少しは見えるが、それがなくては皆目わからず、しかも雪の中に埋もれては万事休すとなるところであった。幸いすぐに見つかって助かった。

貨車から出て百メートルくらいの所に、トタン屋根のある長い野菜の置き場のような建物の下に休憩させられた。屋根は穴だらけで十年以上はそのままであったようだが、空の星が見えるようなことはなかった。

どうやらここでしばらく過ごすらしい。幸い床はコンクリート張りで、天井には裸電球がついていた。この五十日ほどは電気のない山や野原で過ごしたので電球の光には文明の恵みがあった。四方の囲いは無かったが、一応携帯天幕を張って風を防いだ。昨日までの暮らしを思えば御の字であった。

そのうちにタブロイド版の新聞が配られて、古い兵隊は「そんなものアカの宣伝だ。読むな」と

言つたが、何が書いてあるかは読まなければわからないので読むことにした。

我々の宿舎はその物置き場のような所からさらに百メートルぐらいの所に五、六棟あつて、各々は五十坪ぐらいで、その中はさらに四室ぐらいに仕切つてあつた。どうやらこれまでソ連の囚人が住んでいたらしい。中は二段装置になつていた。

翌日からその掃除や修理が始まり、外回りに鉄条網を張つた。自分で自分を出られないようにする鉄条網である。情け無いが致し方ない。

また、近くの山まで、白樺の木を切りに行き、それはペーチカの燃料にするためであつた。

## 六、労役

ここはレンガを作る工場であり、千人のうち五百人が残り、他の人五百人は近くの森林伐採場に行つたようである。

レンガ工場の作業を工程順に述べると、

1 採土 粘土層をパワーショベルで掘り取る

(ソ連人の仕事)

2 トロツコの連結 粘土の入つたトロツコを順次つないでウインチに接続する(日本人の仕事)

3 ウインチで巻き上げられたトロツコを工場内まで押してゆく(日本人の仕事)

4 トロツコを傾けてコンベアに入れる(ソ連人の仕事)

5 コンベアの粘土はミキサに入つて混練される

6 混練された粘土はレンガの寸法で押し出される(ソ連人の仕事)

7 寸法に切られた粘土を台車の上の枠に移しかえる(日本人の仕事)

8 その台車を予備乾燥炉まで押して行く(日本人の仕事)

9 予備乾燥終了後、焼結炉に移動(日本人の仕事)

10 焼結後窯出し(日本人の仕事)

## 11 貨車積み（日本人の仕事）主に夜間

作業時間は内務省関係は八時間であった。面白いのは馬も八時間労働であったのには驚いた。先のトロッコをウインチにつなぐ作業のところでは人がフウフウ言つてトロッコを押しているのに、傍らで馬が麦を食べているので、現場監督に「馬に引かせれば良いではないか」と言つたところ、答えは「あの馬は今朝からもう八時間働いている」であつた。馬にも八時間労働とは徹底したものと感心した。

いずれもそう重労働と言うほどではないが、作業はコンベアの運行スピードが決まつていて、それに間に合うようにしなければならず、いつも腹の減っている日本人には疲れる仕事であつた。しかし炉の周辺は温かいし寒いのは工場への往復と点呼のときだけであつたのは幸いであつた。

### 機械工の仕事

先の工程の中で、パワーショベルが粘土をトロッコに入れるときにパワーショベルの爪がト

ロッコをたたくことがあり、そのために曲がりねじれた車体のバラシと修理。

車軸の修正。ベアリングの交換。

スコップその他道具の作成。レールの切断等。

スコップは厚み五ミリくらい、三尺×四尺ぐらゐの鉄板から切り出すが、タガネとハンマーを使つての作業である。新米の私はいつも大ハンマーを振るう役で、一個のシャベルを切り出すのに四十発はたたかなければならず、一日に四十枚作るのには、一日千六百回たたかなければならなかつた。作るときは続いて作るので十日ぐらゐは続いただろうか。

ソ連はさすがに鉄は多いようで、交換した古いレールは道端に放つてあり、使いたい者は誰でも持つて行つてもよいようであつた。

トロッコの修理作業は外での作業であつたが、あまり寒くない日を選んでくれて、寒い日は室内作業をさせてくれた。しかし機械工の親方は吹雪の中に出て行く時でもまゆ毛一つ動かさず、鼻う

たまじりで外へ出て行くのである。日本人なら雨でも顔をしかめるところであるが、彼らの寒さに対する抵抗力は大したものである。ナポレオンもヒトラーもこの彼らの冬の強さに負けたのであつた。

機械工の仕事は少し頭は使うが、肉体的には他の労働に比べれば楽で、しかもノルマは常に一〇〇〜一二〇%であつた。この国では技術職は得なようにできていた。

夜間のレンガ積み込み、あるいは駅での穀物積み込み、積み卸し等にはよく行かされた。レンガ積み込みは何故か夜の十時ころ、列車が工場に入れば朝までに完了せねばならず、ノルマは二人で一車四千五百枚であつた。

二キロのレンガ四、五枚を並べて両手の掌で挟み、左右から圧力をかけて落ちないようにして、一気に肩に載せて走るのであるが、作業中は冬でも汗が出るが、十分間の休憩時間には汗が引き、震えることであつた。

夜、眠りについたそのころにポーと鳴る汽笛は地獄の呼び声のようであつた。

穀物運搬は麻袋に一杯で五、六十キロあつたが、体にひたつと食いついてくれて安定がよく、倉庫に入れば、帰りは手ぶらなので、何日続いてもよい感じで、その上防寒外套のポケットに何がしかの大豆などを忍ばせる楽しみがあつたが、百キロの砂糖袋の運搬には参つた。肩に担ぐには他の二人が載せてくれるのでよいが、階段を下るときは足元がフラフラして、こんな事は長くはできんぞと思つたことであつた。

#### 七、抑留者の統制管理

①作業は中隊指揮班を通して命令が来て各小隊、各班長を通して伝達された。

体調不順の者は班長の許可を受けて医務室に行き、日本の軍医の診断を受けて処置を決めてもらった。高熱があるとか下痢をしている者は医務室、次のクラスの者は班に帰つて休養、いよいよ

軽い者は管内作業で掃除等々をさせられた。全体の一〇%くらいまでは認められていたようであった。

ソ連の軍医も診断に立ち会っていることもあったが、概ね日本の軍医の判断に任せられていた。

②就労の判定もほとんど日本の軍医が患者の様子を見て決定していた。

③神経痛等、外に何の症状も現れない者は休めないで、足を引きずりながら仕事場まで行き、その班長の判断で体を休めていた。

たまたま厳しい班長等がそういう兵隊を殴ったりすると、警戒兵が飛んで来て、殴ってはいかんと注意していた。

④ビタミン不足になってはいかんということで、軍医の指導で松葉を煎じたのを食事の前にコップ一杯飲まされた。また兵も作業の合間にタンポポ、アザミなどを採ってきて岩塩の粉でもんで食べていた。

入ソ一年たったころから食料も少しはよくな

り、下痢患者には炊事班手作りのカタクリ等が支給されて、命を救われた者もいた。とにかく一日何十回もの下痢患者もいて、だめかと思われたが、炭のように焼いたパンで生き抜いた者もいた。

⑤作業に出る時、帰って来た時は必ず点呼があったが、当番のソ連兵はあまり学校に行っていないので、自分の名前を書けない者もいたくらいで、点呼は下士官が当たっていたが、掛け算は得手でないらしく、日本兵を五列に並べて、五、十、十五と数えていくのである。順調に行っても三十分はかかるので、途中隊列を乱した者がいて注意すると、今まで数えて来たことを忘れてまた初めから数え直すので、点呼が一時間にもなり、腹は減るし寒いしで情けないことであった。

⑥初めの年は夏の軍衣であった。冬物もあったが、上位者から取ってゆくのので兵は終戦の時までであった。自分は古い軍衣を拾い、それを中に縫い込んで、少しでも寒さを防いだ。毛メリヤス

のシャツもあつたらしいが兵にはなかつた。

防寒外套と防寒靴、防寒大手套は支給されたので、外を歩くのに支障はなかつた。霜焼け防止のため靴下は毎日交換し、洗濯して干した。

### ⑦食事

朝は小鳥の餌のアワを二度炊いたお粥、飯、ご飯を二人で分けて食べた。副食はなし。昼は黒パン三〇〇グラムに砂糖十五グラム。夜は馬糧のコーリヤンを二度炊いたお粥。それも飯、ご飯一本を二人で分ける。副食は直径五センチくらいのバレイシヨ六、七個くらい。月に一回くらい塩漬のニシン一尾がつかうことがあつただけである。皆鳥目になってしまったので、月一回町に入浴に行くが、そのときは皆前の人の腰紐を持つてはぐれないようにして行つた。

十二月三十一日、今夜は一装用の飯を食べさせるから楽しみにしておいてくれという炊事係からの伝言であつたが、真つ暗になつてもなかなか上がつてこなくて、やつと八時ごろに上がつてきた

白米は一人当たり小さな茶碗の一杯分くらいであつた。

糧秣はすべて当日分は当日支給であつたから、当日受け取つたもみを当日臼を使って精米するので、時間もなく、もみだらけのご飯であつた。しかし何と言つても久しぶりの白米なので、暗い石油ランプの明かりの下で、一粒一粒もみを割つて食べたことであつた。

平成の世になつて、会社の昼食の食器には米がくつつきやすく、食器返還のときに当時を思つて申し訳なく思うのである。

収容所での食物の分配は当日の当番が皆の面前で分配するが、皆目を皿のようにして、どれが多いか少ないかを見て、少しでも多い方をとるのであるが、その顔は餓鬼であつた。

しかし、自分が何かの用事で帰りが遅くなつたとき、二人で飯盒一本であるから、半分ならどのくらいと知っているのであるが、そういうときは決まって多いのである。戦友さんは多い方を先に

取ったと思われたくないのです、私の方を多くして残してくれたのだろう。戦友さんの気持ちはありがたいものであった。

⑧休日は確実に日曜日ごとに休みであった。一冬過ぎて食料事情も少しよくなったところ、友の会ができ、短歌や俳句のクラブも発足した。また、器用な連中はマージャン牌や将棋、碁石を作って、それぞれ楽しむようになった。

さらに三カ月たった夏頃には劇団もできて、演劇を見せてくれて、収容所の人やら地方の人も見に来て、女装の女形を見てあのマダムはどこから来たのか聞くのであった。

⑨収容所の建物は前からあった建物で、直径三十センチほどの丸太を積み重ねて外からしつこいを塗ったもので、窓は二重ガラスになっていたが、破れていたため、室内の湿気がその間に入って凍り、氷の壁になっていた。

二段装置になっていて、老人や少年義勇隊の者は上の段で寝て、下は若い者が寝た。床は板張り

であったが、そこから三十センチくらいのところ  
に下段の板敷があつて、その上にむしろを二枚重ね、その上に携帯天幕を張り、毛布一枚を敷いて寝た。

枕元に窓がくるが、凍っているので防寒帽をかぶったまま寝た。毛布は一人一枚しか持つてなく、一枚は下に敷いたので、上は二人で一枚の毛布を一緒にかぶって寝た。下に敷いたムシロの二枚のうち下側は凍っているので日曜日に干して上下交換して使った。

寒い夜は背中が冷え、左下にすれば左下が冷え、右下にすれば右下が冷えて、とうとう座って夜の明けのを待つこともあった。

そのため背中の神経が変になり、後に自律神経系を傷めることになり、胃、心臓に変調を来すことになった。

一緒に毛布をかぶって寝ていた初年兵さんは、風邪を引いたと思っていたら肺炎になり、しかも結核性の末期の肺炎であったから、こちらも感染

し、一年後に発病し、十五年の療養をすることになった。

#### ⑩洗脳教育

初の冬を越したころ、見たこともない小柄な貧相な男が来て、営内を歩いていたが、後で隊長から「軍国主義は誤りだった。これからは民主主義になる。また、帰国は民主主義のできたところから帰ることになる」という説明があり、我々初年兵は普通の作業のほかに水汲み、掃除、ペーチカ当番、飯上げ等の雑用を言いつけられていたが、戦後はもう後に入って来る人はいないので、いつまでもこんなことはかなわぬとその趣旨に賛同し、木村大隊長の発案である「全関東軍将兵に告ぐ」と言う檄文に賛同した。

⑪そして階級章は外してしまった。また、内務班の雑用も交替でもらうことになり、二十一年の秋ごろから、大隊長も選挙で選出することになり、所内の空気は大変和らいだ。

そして次々と来るハバロフスクの日本新聞の記

事を丹念に読み、また法政大学を出た主計中尉の解説を聞いた。

また、ノルマの研究会もでき、ノルマは初の三カ月は六〇%で一〇〇%に計算するとか、石混じりの土の土掘り何%とか、凍土の土掘りは何%とか、いろいろと規定があることを知った。現場のソ連側の監督には掛け算のできないのがいて、面積でも二×三を二三とするのがあるので注意せよということであった。

⑫日本人には懲罰は全くなかった。逆に、收容所長以下全員が懲罰を受け、懲役に服したことがある。

入ソ間もなくのことであったが、收容所長が「時計を皆が持っているのと取られることがあるから、自分が預かる」と言うので、皆差し出したところ、どうも自分の時計に似たのを地方人が持っているようなので、たまたま回って来た警察官に言ったところ、早速調査の上、所長は八年の刑、その下の者は四年の刑になり、他の三十人余りも



皆転属になったという事件があった。

入ソ二年目になると、食料事情が少し良くなるとともに、人間の欲望も持ち上げてきて、色気の話も出てくるし、縫製室にいた三人の日本人女性にラブレターを書く者も出るし、けんかも始まった。去年まで全くなかったことである。

ダモイの確かな情報はなかったが、何かそう長くはないという空気が察せられてきた。

警戒兵の緊張が緩み、ソ連の囚人に対する警戒は五十人に対し四人で、しかも銃は常に構えているが、日本人には二百人に対して一人で、銃は逆さにして肩からぶら下げている。

私も元気が出てきたところで、もともと転んでただで起きるようなことはできない性分であったから、この機会にソ連のことをできるだけ勉強してみようという気になり、戦前、日本の政府、警察は何で共産主義を恐れたのか、また、反対に、一部の人は生命の危険まで冒して共産主義を

広めようとしたのか。そして今、自分らが来ているこの国の実体はどうなのか。その辺のところをこの目で確かめたいと思った。

幸い収容所には日本語で書いたソ連の成り立ち、法律、生活の本もあり、日本語の話せる政治部将校もいる。それらを秋の夜長に読むことにした。どうせ寝るまで時間には十分にあるのである。

また、職場には十人近くのソ連人がいて、その人らとペアを組んで仕事をすることもあって、彼らの日常生活を知ることができた。

収容所に少しではあるが日本語の本があるということ、それ自体も考えるに値することだ。ソ連当局はこの日本人抑留者に対してどういう考えや期待を持っているのだろうか。戦後の冷戦が始まろうとしていたそのころ、日本人をどのような使い方をしようと考えていたのだろうか。

いずれにせよ日本語のわかる政治部将校を配置していることも深慮遠望のあることと思われた。そう思えば、ソ連に連れて来られたことも、あな

がちむだではないような気がしてきた。

法政大学を出た主計中尉の解説を聞いた。また、ノルマの研究会もできた。

## 八、帰還

正式連絡は二年の抑留生活を送ったホーロ地区  
ピヤジムスカヤ第七収容所であった。

そこを出発したのは三月二十八日であったが、その一週間前から散髪をしたり衣服を替えたりして、二度、三度と整列点呼、物品検査があつて、今日はこれまでということが二、三回あつた。個人間のリンチを防ぐためと言うが、どうもわからないことだ。そして三月二十八日の本当の帰還の日にはアクチブの七、八人を残して出発した。三月三十一日ナホトカ着。

そこでまた身体検査があり、病弱者はすぐに帰国ラゲルに入ったが、健康者はそこから三キロほど離れた所にある第五三ラゲルで、それまで作業についていた作業隊と交代した。

またかという気持ちにはあつたが、順繰りに交代することだし、海は見えているし、帰還船も確かに時々は入るので、そう落胆はしなかつた。

しかし、ここの管轄は今までの内務省と違い、赤軍直轄なので、給与は良いが、労働は八時間とは限らず、作業命令の指示量ができるまで働かされた。作業は主に土木、建築、港湾等で、学校やマンシヨン建築であつた。

奥地からどんどん送られてくる抑留者の中には、船にも乗せられないほどに弱った人もいて、そのほとんどは栄養失調で座る元気もなく、トラックの上に折り重なるようにして横になつていた。

その人たちは、我々の第五三ラゲルから程近い所にある第八八病院に収容されたが、なすすべもなく、日本を前にして死んでいき、五三ラゲルからは毎日五十人の穴掘り要員が出て行き、遺体を埋めたのであつた。死んだ本人たちはさぞ無念なことであつたらうと思われる。穴掘り作業

は一月以上続いたので、そこだけでもかなりの数であった。

八月二十七日、私も順番が来て、帰国できることになったが、一カ月近く食べられない状態が続いていたので、担架に乗せられて、病院船高砂丸で舞鶴に向かった。八月二十九日舞鶴着。

## 九、帰国後の生活

直ちに国立舞鶴病院に入院。自律神経失調症と診断され肺結核の疑いありとのことであった。

病舎の外にはキンモクセイの木が植えてあって良い香りがしていて、見てみたいと思ったが、足が立たなかった。シベリアにはこんな花の香りはないぞなかったのであった。日本の国に帰ってきただという実感であった。

しかし、胃腸の過敏さはお粥以外のものは受け付けなかった。ネギもタマネギ、ソースもだめだった。

脈は細く早く、夜になると消えてしまうのでな

いかと思われてなかなか眠れなかった。

六人兄弟の次男と生まれて、この終戦後の混乱の時代に、本来ならば自分が親兄弟姉妹の面倒を見るべきなのに、逆に自分が皆に助けられるとは情けない。いっそ死んだ方がよいのでないかと自責の念にかられるようなことであった。

結核の方はその段階ではほんの初期で、しばらく休めば治るよと医者は言ってくれたが、秋になって風邪を引くと長引いて、結核に効く薬はないので、安静にするしか方法はなかった。

そして安静にしていると、夜が眠れず神経が高ぶるといふ悪循環に陥り、毎朝夜が明けるところになって、疲れてウトウトとするようなことであった。

眠れぬ夜は、数を数えてみたり、お経を上げてみたりしたが、意識の底にある不安はなかなか消すことができなかった。

安静にしても、胸の方はよくならず、二十六年秋には左肺全野に及び、たんの中に結核菌が

証明され、開放性結核として、結核病棟に隔離されることになった。しかも菌は腸にも及び、三九度の熱と腹痛が続き、結核の終末の症状であったから、これが最期と観念せざるを得なかった。

幸いアメリカで開発されたストレプトマイシンが使えることになり、奇跡的に症状が改善された。

しかし、この薬の効用は一時的なもので、半年もすると、また進行してくるので、気胸療法が追加されたが、これとて危険な処置で私の前に二人が死んだので、週一回の気胸療法のある日は、下着をすべて換えたものであった。

しかし、新米の医師が器具の操作を誤り、膿胸を併発。二枚の肋膜の間に血液がたまり、さらに二年の安静を強いられることになった。運命はなかなか厳しいものであった。

菌が開放性となったため、次に移された病棟は同じ病院の中でも恐れられ、その病棟の前を通るときは息を止めて走ると言われたくらいの病棟で

あった。

ベッド数は四十五で、一年に七十五人死んだということであった。平均寿命九カ月という戦争にも劣らぬ修羅場であった。薬のないころの結核の最期はこんなすごさであった。

その病棟に入った日の正午ごろ、向かいのベッドの市川さんが大咯血をした。鯨の潮吹きさながらに、吹き上げるのである。それも真つ赤な鮮血である。これはいよいよすごい所に来たなと驚いた。

しかし彼は、心配して駆け寄った同室の人に、汚れた顔を拭きながら、にこりとして「これぐらい何ともないよ」と言うのである。さすがに軍人だなあと感心させられた。

そして隣のベッドの元兵曹だった宮本さんは「生まれてこなかったと思えばもともとさ」と言っていて皆を笑わすのである。そう言う彼も膿胸で、息をするたびに胸の瘻孔から膿を出しているのである。

客観的に見ても、極めて難しい局面にありながら、皆割に落ちついているのである。

先生の回診の後で、看護婦が忘れていったレントゲンを比べ合つて見てみると、同室十四人の中で、事、胸だけに限つて言えば、自分が一番軽いのである。そうとすれば、皆が死ねば次は自分の番だが、それまでは死の事は考えまいという気になった。個室にいたときはクヨクヨと考えてたなあと思つたことだつた。

また、眠れない夜も自分ひとりでない。あちこちで眠れず体を動かしている人もいる。苦しんでいるのは自分だけではないと思うようになった。

私の膿胸も二年近くで収まり、医師から少し動いても良いよと言われたが、膿胸が治るとき、心臓は肺、横隔膜、縦隔と癒着して、肺活量も一三〇〇ccしかなかったため、ベッドの上に座るのが精いっぱいだつた。

何とか動く練習をしなければならぬので、最初の一週間はベッドの周り、続いて、廊下を歩い

て、脈を見て、良ければ二回往復、三回往復と回数を増やしていった。常に脈が五分くらいで元に戻ることを目安にした。

また、外科病棟の中学生とピンポンをして、汗を流すまでになつた。

三十四年ごろ、大体良いのではないかと思つたが、同じく療養していた人たちで、家庭の事情等で早く退院した人たちの結果を見ると、十分な療養が大切ということを知っていたので、昭和三十七年まで入院を続け、絶対大丈夫というところで退院。

三十七年秋、大阪に出て、弟の家に寄宿して就職。

しかし大阪梅田の駅前のラッシュを見たときは、こんな中で通勤できるのだろうかかと不安になつて、定期券も試しに一カ月分を買つて翌日から出勤した。ラッシュもその中に入つてしまえば一緒に流れていって、何も苦しいことはないことがわかつた。しかし電車が混んだとき、肺活量が

少ないので息苦しくなって、高槻から大阪まで通うのに、途中の吹田で降りて、一休みしてまた乗り継ぐということも何回かあった。

仕事は造船関係で、高い所に登ることもあり、深い船底の空気の悪い所に潜らなければならぬこともあったが、これは本職なので、逃げ隠れすることはなくて、汗だくになって頑張った。

四十一年、名古屋のアルミ鋳物の会社に勤めることになり、愛知県付近は空気が良く、健康も順調に回復し、その年結婚、二女をもうけ、それぞれ二人の孫を得て、共に元気に過ごしています。

シベリア抑留中はもちろん、その後の療養生活、また社会復帰後の生活において、数多くの方々の助けがあつて、今日生きていられることを感謝しております。考えれば本当に奇跡の連続のような経過を経てきました。とても私の力ではありません。ありがたいことであります。この上は少しでも人のため社会のために役立つことをして、今までのご援護にお応えしたいと考えており

ます。ありがとうございます。

シベリアの抑留生活を書くように言われましたが、私のシベリア抑留生活は一般の方々の極限の生活に比べれば本当に楽なものでしたが、その後の闘病生活は、書きましたように、これは苦しいものでした。

辛い乗り切ることができましたので、こうして回顧もできるわけですが、もし途中で死んでいたら、哀れなことだったでしょう。大勢の方々のご援助に重ねてお礼申し上げます。

#### 【執筆者の紹介】

糸井紀伊氏の抑留の手記は、強制労働的なものも少なく、ノルマ、食糧等の環境もさほど悪くなかったと思われませんが、昭和二十二年八月末舞鶴着、身体検査で直ちに舞鶴病院に入院、病院を変え、昭和三十七年、大丈夫というところで退院されました。

約十五年間の闘病生活の気力は大変だったと思

うし、貴重な体験をされたと感じました。

糸井さんは現在、当協会の理事です。

(愛知県 森藤 眞一郎)

## 生涯

三重県 中森 讓

### 波瀾万丈の私の生涯

大正十四（一九二五）年九月三日、父、警察官のため名古屋笹島署で生まれる。三歳まで名古屋居住。

家は一志郡大三村二本木（浜城）。大三村とは、大村（二本木）、岡、三ヶ野が合併して、大三村と名称する。

昭和六（一九三一）年四月一日、大三村尋常高等小学校入学。当時は戦争の多い時代で、世界中がごたごたしていた。軍隊と軍需工場に力を入れて一般国民は本当に貧しい生活だった。農家にあ

りながら食糧は麦八分入りのご飯、野菜ご飯、いも飯。肉なんかは全然食べられない。刺身なんかは正月位しか食べられなかった。魚は川で釣りして食べるし、肉は買っては食べられないが、父が狩りをしていたので、山兔、山鳥は時々食べたぐらい。

当時は、冬は寒く零下一〇度以下の日はいつもあり、雪も多く降り積もって通学も大変だった。学生服の上に綿入れのハンコを作ってもらい着て通学するが、汚い話ではあるが、青鼻が出るわ出るわ、ハンコの袖で拭くので誰の袖を見てもカバカバ。鼻をかむ紙さえなく、新聞紙をもんで柔らかくして拭くと新聞紙のインクで顔は真っ黒、今思い出せば面白いが、そんな時代であった。腕白坊主の方で、友達もそんなばかり多くいた。余り勉強は好きでなかったがママママの所かな……。当時は誰も余り勉強はしなかった。それより農家の者は田畑の手伝いの方が忙しかった。私は学校から帰ると勉強どころか、農繁期、養蚕期とも